

# たまいたま 川柳



曙光

平成27年  
1月号 (No.662)

日川協加盟

## 巻頭言

いっ加減のいっ加減

願法みつる

午年の去年は、神馬ならぬ荒馬の年だったような気がする。するのは私だけだろうか。辛酸な世相を現出した地球も日本も、様々な事象で人間を悩ませてきた。

個人的には、不本意ながら川柳活動に振り回されて、ゆるりと上を向いて歩く余裕がなかった。だがどうやら社会的常識に欠ける川柳莫迦にも成らずに済んだらしい。腹の底から川柳には染まっていなかったと言っことだろう。つまり、いい加減な人間だったのかも知れない。

いい加減とは、本来、適当・適度・過ぎず・偏らずの意味だから、可も不可も無いという意味なのだろうが、一般には中途半端で無責任なことを表す言葉として受け止められる。人物像や言語態度の現象などで。

しかし「加減」の量り方には、ひとり一人の感触に差があることが判る。塩加減・湯加減・味加減・力加減・褒め加減・等々。勿論、森羅万象にも当てはまる。

在るが儘の「いい加減」な川柳への関わりも、許される範囲だったのだろう。川柳しかない人生なんて、勿体ない話である。足るを知って無理はしないことだ。

サテ今年も未年、どのようなヒツジ現象が起きるか。バーベキューになる羊がいても良いではないか。鯨や鰻ほどは騒がれないだろうから。在るが儘の羊で居よう。

## 日日是好

願法みつる

占って絞った知恵は元の策

歳月を待たず影だけ老けてゆき

吊り橋のような浮世を風の中

目が回る矢張り地球は歪んでる

衛星へ託した夢を見るあの世

どくだみを飲んで抑える肚の虫

にこやかに数え合ってる嘘の数